

令和 元 年 6 月 24 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02785

研究課題名(和文) 英語コミュニケーション能力のパフォーマンス評価法の理論的・実証的研究

研究課題名(英文) Theoretical and Empirical Research on Performance Tests of Communicative Competence in English

研究代表者

酒井 英樹 (Sakai, Hideki)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：00334699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は英語コミュニケーション能力のパフォーマンス評価法を検討するものであった。第1にコミュニケーション能力の評価に関する3つの方法(CEFRもしくはCEFR-Jに基づくCan-Do リストを用いた評価、タスク利用型の言語評価、ダイナミック・アセスメント)を理論的に整理した。第2に、Can-Do リストを用いた評価タスクの作成と評価基準の整理を行い、話すことと書くことの評価方法の妥当性を検討した。第3に、3つの評価方法の関係を分析し、タスク達成度、ダイナミック・アセスメント、タスク利用型の言語評価の流動性が相互に関係する可能性を示した。教育的示唆は研究発表及び論文発表において行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、コミュニケーション能力のパフォーマンス評価法に関する3つの異なるアプローチ(CEFRやCEFR-Jの言語行動を主軸とする目標設定に基づく評価、第二言語習得理論の研究成果を背景とするタスクに基づく教授法におけるタスク利用型の言語評価、社会文化論的な立場からタスクの中で参加者がどのように相互交渉するのかのプロセスの点から評価を行うダイナミック・アセスメント)を包括的に整理し、その関係を明らかにしようとしたことである。

社会的意義に関しては、日本における外国語教育では4技能重視の指導と評価が推進されている。この中で、パフォーマンス評価法の研究は、教育的示唆も得ることができる。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at considering three different approaches (CEFR-based assessment, task-based assessment, and dynamic assessment) of performance tests on foreign language communicative competence. First, the three approaches were compared and contrasted based on the literature review. Second, assessment tasks based on CEFR and CEFR-J and the evaluation criteria for the performance were created; and the evaluation utilizing the tasks and criteria were argumentatively validated. Third, two studies attempting to clarify the relationships among the three approaches were carried out. The results suggested that the assessments based on task-achievement, dynamic-assessment, and fluency; however, more research will be needed for generalization of the findings. Pedagogical implications from the project were provided in the presentations and publications.

研究分野：第二言語習得、英語教育学

キーワード：教育評価・測定 パフォーマンス評価 スピーキング・テスト ライティング・テスト

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19（共通）

1．研究開始当初の背景

本研究は、英語コミュニケーション能力を測定するパフォーマンス評価法を検討するものであり、学術的な背景は以下の通りである。コミュニケーション能力の評価に関して、2000年代に入り大きく3つの学術的な進展が見られている。第1にヨーロッパにおいて、複数言語主義に基づいてヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）が整理され、第二言語を使って何ができるかという言語行動を主軸とする目標設定がされ、言語教育が進められるようになった。これに伴い、CEFRに基づく評価（Can - Doリストの形で定められた学習到達目標に準拠した評価方法）が研究されるようになっていく。日本では、CEFR - Jが作成されている。第2に、第二言語習得理論の研究成果を背景に、タスクに基づく教授法が世界的に広がっている。タスクに基づく教授法においては、主としてタスクの完遂によるパフォーマンス評価や流暢さ、正確さ、複雑さなどの言語面に焦点をあてた評価が提案されている。第3に、社会文化論的な立場から、タスクの中で参加者（評価者と学習者）がどのように相互交渉するのかのプロセスの点から評価を行うダイナミック・アセスメントと呼ばれる考え方が提案されている。これら3つの評価法（CEFRに基づくCan - Doリストを用いた評価、タスク利用型の言語評価、ダイナミック・アセスメント）の背景とする基盤が教育政策、第二言語習得、社会文化論と異なっており、これまで3つの評価法を包括的に検討した研究はない。

2．研究の目的

本研究の目的は、英語コミュニケーション能力に関するパフォーマンス評価法について理論的・実証的に検討し、英語コミュニケーション能力の測定・評価に関する教育的示唆を得ることである。特に、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）やCEFR - Jなどの規準に基づくCan - Doリストを用いた評価、タスク利用型の言語評価、ダイナミック・アセスメントに焦点をあてる。この目的の遂行のために、パフォーマンス評価に関する文献調及び理論的考察、中学校・高等学校の英語授業を対象にした実証研究を実施する。最終的に、英語コミュニケーション能力の評価に関する教育的示唆を公表する。

3．研究の方法

本研究では、先行研究に基づき、3つの評価法（CEFR（-J）に基づくCan - Doリストを用いた評価、タスク利用型の言語評価、ダイナミック・アセスメント）を理論的に整理する。この理論的考察に基づく、相違点・類似点が実証データにより支持されるかどうかを、実証研究を実施することによって検証する。

（1）3つの評価法の相違点・類似点を明らかにする

CEFR（-J）に基づくCan - Doリストを用いた評価、タスク利用型の言語評価、ダイナミック・アセスメントに焦点を当てた研究結果を考察し、3つの評価法の相違点・類似点を明らかにする。

（2）話すことと書くことのパフォーマンス・テストと評価基準を作成する

CEFR（-J）に基づくCan - Doリストに焦点を当てて評価方法の検討を行う。中学生や高校生のコミュニケーション能力を測定するために、話すことと書くことのパフォーマンス・テストとCEFR（-J）に基づく評価基準の作成を行う。また、中学生を対象にして、生徒のコミュニケーション能力の測定を量的に行い、評価方法の妥当性を検討する。

（3）3つの評価方法の相関関係を明らかにする

中学生を対象にして実験授業を実施する。3つの評価法による生徒のコミュニケーション能力の測定を量的に行い、3つの評価法の相関関係を明らかにする。

(4) 教育的示唆の共有を図る

得られた教育的示唆について、英語コミュニケーション能力のパフォーマンス評価に関するワークショップを実施し、研究成果を公表する。

4. 研究成果

(1) 3つの評価法の相違点・類似点について

パフォーマンス評価に関する研究を理論的に整理した。理論的研究として、ヨーロッパにおいて複数言語主義に基づいて提案されたヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) に基づく Can - Do リストを用いた評価、タスクに基づく第二言語教授法においてタスクの完遂によって学習者のパフォーマンスを評価するタスク利用型の言語評価、社会文化論的な立場から評価を行うダイナミック・アセスメントを取り上げた。学術論文及び図書を入手し、研究結果を概観し、3つの評価法の比較・対照を行った。また、平成27年8月から平成28年3月まで東京外国語大学において内地研究を行った。この期間、外国語教育における評価に関する専門家の指導・助言のもと、パフォーマンス評価について理論的研究を進めた。3つの評価法の共通点として、英語コミュニケーション能力を知識ではなく技能として捉える考え方に基いており、評価方法はパフォーマンス評価法である点で共通していることが指摘できる。一方で、CEFRに基づく Can - Do リストを用いた評価は言語能力に焦点を当てており、タスク利用型の言語評価は状況に応じた言語使用やコミュニケーションの目的を考慮しており、ダイナミック・アセスメントはコミュニケーションのプロセスに注目しているというように、3つの評価は、焦点を当てるパフォーマンスの側面に違いがあることを整理した。この成果は、「外国語教育における評価に関する3つの立場 CEFRに基づく評価、タスク利用型の言語評価、ダイナミック・アセスメント」としてまとめられ、中部地区英語教育学会・三重大会(平成28年度6月)において発表した(発表者:酒井英樹)。

(2) 話すことのパフォーマンス・テストと評価基準を作成する

CEFR(-J)のCan - Do リストに基づいて、話すことに関してタスク利用の言語評価のタスクと評価基準の作成を行った。具体的には、話すこと[やり取り]と話すこと[発表]のタスクを作成した。タスクは、話すこと[やり取り]が4種類(質問応答課題、ロールプレイ課題、ロールプレイ課題、クレーム課題)であり、話すこと[発表]が3種類(自己紹介課題、意見課題、あらすじ・感想課題)であった。これらのタスクを中学1年生から高校3年生に対して実施した。得られたパフォーマンスを基に、タスク利用の言語評価の評価基準を整理した。その評価基準に基づいて、中学1年生から3年生(1301名)と高校生1年生から3年生(362名)のパフォーマンスを評価した。そのうち、中学3年生202名のデータを用いて、CEFRに基づく評価、自己評価、外部指標との関係性を分析し、妥当性を検討した。その結果、含意尺度分析により、レベルの異なる4つのタスクの評価に階層性が確認でき、CEFRに基づく評価方法の構造的妥当性は確認できた。一方で、自己評価や外部指標との相関分析により、外的妥当性は低いことが示された。本研究のタスクが、モノログとダイアログを区別しているのに対して、自己評価や外部指標のテストでは区別されていないことから、タスクの内容の違いが影響を及ぼした可能性を指摘した。この研究結果は、「含意尺度分析及び自己評価と外部試験との相関分析に基づくスピーキング・パフォーマンス評価方法の検討」としてまとめられ、全国英語教育学会島根研究大会(平成29年8月)において発表した(発表者:酒井英樹・阿部敏子・菊原健吾・木下愛里・須野原美香)。

CEFR(-J)のCan - Do リストに基づいて、書くことに関するタスク利用の言語評

価のタスクと評価基準の作成を行った。タスクを中学1年生から高校3年生に対して実施した。得られたパフォーマンスを基に、タスク利用の言語評価の評価基準を整理した。さらに、大学生80名を対象に、ライティングの評価方法の妥当性を検討した。その結果、含意尺度係数の観点から階層性が確認された。また、本研究の評価方法によるレベル判定とCan-Doリスト形式の自己評価との相関係数は統計的に有意に低いことが確認された。さらに、本研究の評価方法による判定とラッシュ分析による実際のパフォーマンスの能力推定値の相関は比較的高いことが確認された。同様に、自己評価とラッシュ分析による自己評価の能力推定値の相関も比較的高いことが示された。さらに、ラッシュ分析による実際のパフォーマンスと自己評価の能力推定値の間に中程度の相関があることが示された。この成果は、「ライティング・パフォーマンス評価の検討 含意尺度法、自己評価との相関分析、ラッシュ分析を用いて」としてまとめ、『信州大学教育学部研究論集第12号』（平成30年3月）に掲載した（執筆者：伊東哲・菊原健吾・酒井英樹）。

（3）3つの評価方法の相関関係を明らかにする

平成29年度末に中学生を対象にして、読んだことに基づいて話すという領域統合型の言語活動に焦点をあてた単元を実施し、データを収集した。平成30年度にデータ分析を行った。生徒は中学校2年のクラス（40人）であった。単元の目標を「読んだことに基づいて、感想を伝え合う」に設定した。評価方法は、授業中の観察と単元後のパフォーマンス評価であった。授業中の観察については、評価規準（読んだことに基づいて理由とともに自分の考えを述べることができる）を意識しながら、授業中の状況（教師と生徒とのやり取り）に基づいて教師の気づきを記録した。この評価は、ダイナミック・アセスメントを意識したものであった。パフォーマンス・テストは、タスクの達成度と言語面の点から評価した。主な結果は、タスクによっては、観察に基づく評価とタスクの達成度の評価の相関が高かったこと、タスクの言語面のうち流暢さとタスクの達成度の評価に相関が見られたことであった。この研究成果は、「領域（技能）統合（読んだことに基づいて話すこと）の指導と評価」としてまとめ、全国英語教育学会京都研究大会（平成30年8月）で発表した（発表者：酒井英樹・矢野司・米山聡・木下愛里）。

平成30年度に中学2年生を対象にしてデータを収集し分析した。中学校学習指導要領の領域ごとの目標のうち、「社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。」に関して、第2学年の学習到達目標「日常的な話題や関心のある話題について、聞いたり読んだりしたことについて、自分の考えや感想を伝え合うことができる。」を設定した。この目標に関して、「Our Talk on the News ～対談新聞を書こう～」（全11時間）という単元を構想し、評価した。その際、技能統合のCan-Doリストに基づく評価基準を整理した。主な結果は、自己評価については向上が見られたが、スピーキング・テストでは明確な向上が認められなかった。この成果は、「中学校英語科における技能統合型の言語活動の指導 読んだことに基づいて話すこと〔やり取り〕」としてまとめ、『ARELE』（全国英語教育学会、平成31年3月）に掲載した（執筆者：酒井英樹・佐藤大樹・木下愛里・菊原健吾）。

（4）教育的示唆の共有を図る

英語コミュニケーション能力のパフォーマンス評価に関するワークショップを実施し、研究成果を公表する予定であったが、実施できなかった。教育的示唆は、それぞれの研究発表及び論文発表を通して共有化を図ったのみとなった。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

酒井英樹、佐藤大樹、木下愛里、菊原健吾、中学校英語科における技能統合型の言語活動の指導 読んだことに基づいて話すこと〔やり取り〕、ARELE、30号、303-318、2019、査読有

伊東哲、菊原健吾、酒井英樹、ライティング・パフォーマンス評価の検討 含意尺度法、自己評価との相関分析、ラッシュ分析を用いて、信州大学教育学部研究論集第、12号、1-16、2018、査読有

<https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/ronshu/12/index.html>

〔学会発表〕(計3件)

酒井英樹、矢野司、米山聡、木下愛里、領域(技能)統合(読んだことに基づいて話すこと)の指導と評価、全国英語教育学会京都研究大会、2018

酒井英樹、阿部敏子、菊原健吾、木下愛里、須野原美香、含意尺度分析及び自己評価と外部試験との相関分析に基づくスピーキング・パフォーマンス評価方法の検討、全国英語教育学会島根研究大会、2017

酒井英樹、外国語教育における評価に関する3つの立場 CEF Rに基づく評価、タスク利用型の言語評価、ダイナミック・アセスメント、中部地区英語教育学会三重大会、2016

6. 研究組織

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。